

今年の正月屠蘇を飲みながら、長年日課としてきた早朝六時半のラジオ体操とウォーキングは雨天以外は欠かさず実行し、一月は執筆活動を封印し情眠と読書三昧で過ごそうと決めた。

『中村屋のポース』中島岳志著(白水社)は、感銘して読了した一冊である。拙著「奇妙な」シリーズ第二作『奇妙な猫たち』(文芸社)執筆の際新宿中村屋の歴史を調査した経緯がある。

高校大先輩、文芸評論で名を成した臼井吉見が十年費やした大河小説『安曇野』(筑摩書房全五巻)に中村屋が描かれている。主人公は実業家相馬愛蔵・良(黒光)夫妻、「中村屋サロン」に出入りした彫刻家萩原碌山、教育者井口喜源治、社会主義者木下尚江、後段で本人も登場する歴史小説で谷崎賞を受賞した。良(黒光)と尚江の二人は同郷ではないが、他は作者同様信州南安曇郡(現安曇野市)の出身者。本郷東大前でパン屋を創業した相馬愛蔵一家の歴史と前述「中村屋サロン」の住人達を描きながら、激動の明治、昭和中期の日本を語る臼井の代表作である。以後安曇野という造語が広く世間に定着した。

その『安曇野』中にも、亡命者R・Bポース(Roh Bahari Basu)の話も出ていたと記憶する。

印度時代のR・Bポースは、「ハーディング総督爆殺未遂事件」を主導する急進派独立運動を策すテロリストで、英国官憲から追われタゴールの親族の偽名を用いて、船便で一九一五年神戸に上陸、日露戦の戦勝で沸く日本へ亡命する。日英同盟下の東京で地下活動を開始し孫文や右翼の大物頭山満等と接触。正に印度人の国外退去命令を伝える新聞記事が掲載される国情下、印度独立運動の革命家二十九歳R・Bポースは、

日本亡命後も官憲に追われ中村屋に匿かくまわれる。後に日本に帰化し相馬夫妻の娘俊子を娶る。

第二作短編『奇妙な猫たち』は稚拙だが私にとつては思い出深い作品で、プロローグでは彫刻家碌山と良(黒光)との実らぬ恋の話を用いながら、本編では猫好きの彫刻家岩淵榮太郎を描いた。モデルは碌山同様安曇野出身の彫刻家、晩年二体の十一面観音菩薩石像を彫つて逝つた「石の詩人」の故高島文彦君である。私は文彦君と彼の細君共に高校同級生で、生前彼は東京の美術家集団の一陽会を率い常任理事に就いた。さて日本に亡命したR・Bポースであるが、英国政府手先の探偵に尾行の毎日を経て、滞在十年目で晴れて自由の身を感じながら日本に帰化、俊子と結婚し二人の子を成し防須を名乗るが使命感は決して衰えない。命名は友人犬飼毅である。やがて雑誌「新亜細亜」を創刊する。「印度は帝国主義の要石」とし印度独立は亜細亜諸国の独立に波及すると以下論を展開する。

亜細亜の解放には印度の独立が絶対的に必要である。英帝国主義の本拠である印度が独立すれば全亜細亜は自動的に解放せられるのである。印度は現在英国の戦略的基地となつてゐるのみならず、莫大な経済資源と人力を英国に搾取されてゐる。英国が亜細亜及びアフリカに勢力を占め、独逸に対して抗戦できるのは印度を支配するが故である。一度印度より英国の支配が除去されるならば、亜細亜が解放され、此処に全亜細亜は人類の救済のためより良き新文明を創り得るのである。』

以後極東の地から印度の独立を画策し指導する。一九三七年勃発した支那事変ですら千載一遇のチャンスと捉え日本の世論を動かそうと謀る。「日中両国の抗争にあらず」の論陣をはり「実は世界大戦後英国が支那に対して用いた離間政策にあつた」「支那を喰そのす背後にゐる英国の悪勢力である」

「極東の二大国を相喰わしめる策動を行つた」と。そうした日本の軍事的侵略主義の動向を、新たな帝国主義国家の誕生と見做し印度では、ネルーやガンデー等国民会議派の反日思想が台頭する。

R・Bポースは、その原因ですら「英国による世論の反日化」と強弁、アジア初のノーベル文学受賞者のラビントラナート・タゴールを計五回日本招致し反日化を阻止、二回自ら面会している。

国民会議派の非暴力闘争と立場を異にする政治家チャンドラ・ポース(以下C・ポース)の人氣に注目したR・Bポースは、自ら書簡を送り難局打開を促すが英国官憲により書簡は没収される。二人のポースの共通認識は、英国への武力闘争を含む徹底抗戦であるが、C・ポースは印度で逮捕。飯釈放中に脱出し独ナチスに庇護を求め。一方R・Bポースも、日独伊の連携頼りに英国打倒構想を訴えて、ナチスやヒトラー礼賛論すら展開。

一九四一年米英相手の大東亞戦争勃発。

R・Bポースは、呼応し言論活動を各地で活発化させ大東亞戦争は印度独立の絶好の機会と熱弁を奮い、英国拠点のシンガポール陥落するや、各地の印度人に対して決起を促し、印度独立連盟や国民軍代表が東京で一同に会した。独立運動の表舞台に復帰するべく後日バンコック会議に向つ。
△was a fighter. One fighter more. The last and the best. >と書き自らを奮い立たせ反転攻勢に転じている。

日本軍の仲介で独逸から潜水艦により護送されたC・ポースと東京の帝国ホテルで密談し、そこで印度独立連盟と国民軍の代表を任せる権限の委譲がなされた。結核を患つていた彼は咯血し身体衰弱著しく一九四五年一月鉱泉の客となる。日本の敗戦は同年八月一日。パキスタンから分離した印度独立は二年後の一九四七年八月一日。『中村屋のポース』は残り、印度カリーは戦後六十年経ても店頭でその人氣は衰えることが無い。了